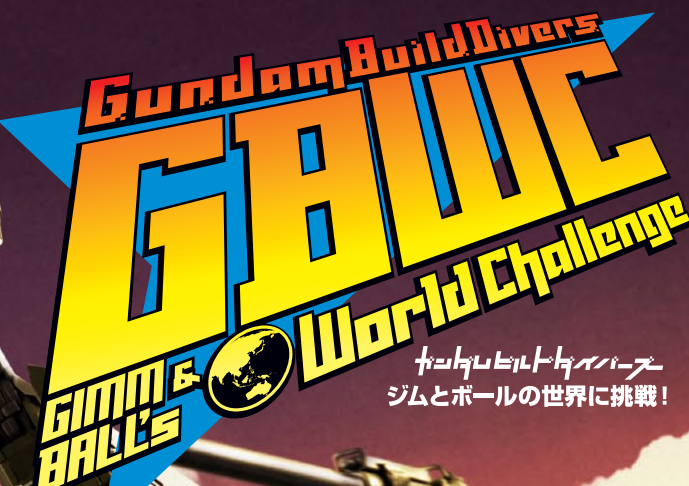


あれから一年、 ジムとボールはGBNの世界に 華々しく還ってきた!!

GUNDAM BUILD DIVERS
GIMM & BALL'S
WORLD CHALLENGE



ギムとボールの世界に挑戦!



kickstart my heart ～闘志(スピリット)のヤツを蹴り上げる～

Episode 0-B kickstart my heart ～闘志(スピリット)ってヤツを蹴り上げる!～

宇宙に、闇がはびこるようになっていた。

彼は、自らのフォースを『結社』と謳った。かつてジムとボールが青い魂を拳に込めてぶつけ合った広漠たるそのディメンション、銀河の片隅の星屑の中で、墮天使長・琉依×Ⅲ醒(ルイじゅうさんせい)はいま、眼下に青い惑星見下ろしながら、満ち足りた笑みをたたえている。

『結社666(トライヘクス)』に集う墮天使たちは、いまや一〇〇翼を数えていた。皆で集うサバトの儀式はこのうえない喜びの時間だったが、しかし彼は、時にひとり愛機を操り、こうして運命と書いてきたための地を訪れる。もう一年が経とうとしている。

あの日は、おのれの遠大なる野望が潰えることを覚悟した。自身の密事を見事に暴いた二人と相まみえた瞬間——おまえ、中学生だな——

しかし、以来二人の姿を見てはいない。あるいは、反撃のいともまずら与えず一撃で撃破され、恐れおののき、再びの邂逅を恐れ、尻尾をまいて現実の世界にひきこもってしまったのか。あの戯れ言も、悔し紛れの当てすっぽうだったのかも。そうに違いない。

現に二人は自分のことを「中二だろっ」などのたまった。否だ、正確には中三だった。

そしていま、野望は着々と進行している。GBNの世界に君臨することで、自分をほっちにしてきたすべての愚民どもをひれ伏させようという戦慄のアルマゲドン。高校生になりお小遣いがアップ、バイトも解禁となり、財布に余裕ができたところで我かもとにやってきた、この新たな審判の分岐(ぶんしん)があれば……。

「これこそが絶対支配のアイコン、維新されし秩序の頂点に君臨する資格を授けり証……」

彼はひとりコックピットで、天命を迎え入れるがごとく、銀河に向け、両手を大きく広げた。

「さあ『666』に集いし墮天使たちよ、我を崇め、我を讃え

「フォーアのメンバーを墮天使とかつて」

「あいかわらず香はしいこと言ってるな」

聞き覚えある声に、琉依×Ⅲ醒は、思わず息を呑み背後を振り返った。

そこに彼らがいる。

二人は帰ってきた。

「うん、パネルラインのスジ彫りも情報量の加減完璧だし、シャープ化もバッチリ。はじめは荒削りでどうなることかと思っただけど」

「こんだけトレーニングすりゃ、誰だって寝ても組み上げられようになるって」

「そんなことないわ。本当に居眠りしながら完成させたのはあなたくらいよ」

アップパー・イーストの垢抜けたファクトリーで、一〇〇体目のトレーニング用キットを組み立てて終了したティムを、彼女は惜しみなくねぎらった。

「最後まであきらめずに一〇〇本ガンブラを成し遂げたのは、ここだけの話、いままでの生徒の中であなたが初めて」

父親が、世界でも指折りのガンブラ・ビルド・トレーナーと知り合いだったなんて初耳だった。しかも彼女の初恋の相手だったとは。

「っていうか、ホントごめん。親父の宝物のジム・ドミナンス……マキさんからのプレゼントだって知らなくて、オレが組み立てたりして……」

「うん、ガンブラは組み上げてあげてこそ輝くのよ。どうせあの箱に入れたまま、ずっととくとくつもりだったんでしょ？」

「正解、めっちゃ怒られた」

彼女はやれやれと懐かしそうに笑って、

「なんだかうれしい、あの人の息子ちゃんの初ガンブラがあたしのジム・ドミナンス、しかも、スクラッチまで……本当に手伝わなくていいの?」

「勝ちたい奴がいて、自分でやらないと意味ないし。1000本ポリバテの指導も頼めるかな」
「あの人の子ね……おまけにガンブラの腕を磨くために、大学まで蹴るなんて」
「一度にあれもこれもできるほど、器用じゃないから」
完成させた1000体目の出来を確認しながら言うティムを、

ジャスミンはまるで我が子を見守るように見つめながら、
「でも、フィアンセの親戚彼女が黙ってないんじゃない？」
それって親同士が勝手に決めたことだし、っていうか、そんな赤裸々まで親父は話したのか——そう告げようとしたティムは、ふと、マキの顔を見つめた。
「ど……どうかした？」
彼女の頬が、ドキッと赤面する。
「うん……ヒゲ、伸びてきてる」
「いやーん、ついさっき剃ったばかりなのにー」

母と妹そして自分、計8人の所帯としては、けっして広くはない——どころか、むしろぎゅうぎゅう詰めのアパートメントの自室、兼ダイニング、兼リビング、兼寝室で、カールはあの日から今日まで、ボールのエア・カスタマイズにすべての意識を集中していた。
「組み上げる、思考の中で……奴に勝てる、最高の、最強の……ボールを……」
あの日、ただ無計画にジャンクパーツを組み合わせたガンブラでは勝負にすらならなかった。なにが足りない？ 自分のボールには……なにを求めている？ ガンブラバトルの女神は、

そんな兄を公園の遊具に見立て、小学生×2名はよじ登り、中学生×2名はボールの授業に備え姉から貰ったお下がりのスクール水着を試着し、高校生×2名は、面倒だからと出勤前にバイト先の制服に着替え、母×1名はキッチンから昼食を運んでくる。
「ほらほらお昼、テーブルに並べるの手伝って。今日のメニューはみんな大好き、エア・蟹チャールハンよ」
「えー！ またエア？！」
中学生×2が、スク水のお尻が窮屈なことを気にしながらゲンナリ言っ。

「乱気流？ 大荒れ？ 動乱？ よくそんな愛称思いついたね」
「オレじゃねえし、つけたの」
「じゃ、誰？」
「うるせーし」
じゃれ合う二人を、カウンターのなかからゆるふわフロントと前下がりにシヨートボブのスマイルが、懐かしげに見守っている。
「お帰りなさい、ジム、ボール」

それから更に半年、ジムとカールは、ダイバーのランクを上げ、フォースを結成し、ガンブラバトルの腕を必死に磨き……いまの二人にとって、琉依×III醒（ルイじゅーさんせい）はもはや敵ではなかった。
琉依は、ポリポッドボールを見た瞬間、その多脚パーツをテスト・ウェイトと判断し、彼に狙いをさだめた。
「あの脚、宇宙空間じゃ、グノースに託っての人間の肉体がごとき単なる邪魔」

それは浅はかな思い込みだった。
その脚は、宇宙空間ではAMBA C（能動的質量移動による自動姿勢制御）として機能した。カウンターウェイトとすることによる反作用のモーメントで、機体の機動性を何倍にも高めることができたのだ。
想定以上のマニューバを披露するポリポッドボールを、琉依は執拗に追った。いつしか隣接サーバへのゲートを抜けていたことに気づかなかったほどに。
そして——

「ひよっとして……誘い込まれたー？」

広がる荒野のデメンションで、ジム・タービュレンスが待ち構えていたのを見てからでは、あとの祭りだった。琉依は咄嗟にHG機動で逃れようとした。次の瞬間、彼の機体からいくつかのパーツが剥がれ落ち、挙動が乱れた。その隙を逃さずジムが放ったライフルは、琉依の機体の急所を一撃で貫いた。
「我に勝利するのは、お前たちは……憎き熾天使の……使いか……」

時計の針は、一分と進んでいなかった。

「お兄ちゃん、エア・ガンブラバトルで賞金貰ったじゃん、あれでたまにはリアル蟹チャールハンつくろよよ」
「しょうがないでしょ、兄貴、大会のあとGBN行って帰ってきてから、なんてだかバイトもやめてずっと自分の世界に閉じこもっちゃったんだから」
某ハンバーガーショップの制服を胸元開放的に着こなす高校生×2は、さすがはもう大人だ。
「あの賞金は大事に使わないと」
それでもスク水×2は食いがかる。
「リアル蟹食べたーい！」
「リアル蟹足にかぶりつきたいー！」
「知ってた？」
カールの頭の天辺への登頂を達成した小学生×2が無邪気に参戦してきた。

「十脚目ワタリガ二科のノコギリガザミって蟹のハサミは、貝の堅い殻でも砕いちゃうくらい強いんだって」
「蟹……は、強い……蟹といえ……」
道は開ける。
「そうか脚だ！ 蟹みたいな多脚があれば、ボールを安定した状態で重力下運用できる……地上戦になっても、奴と戦える！」

半年ぶりのガンダムベースは、今日も大勢のガンブラファンたちで賑わっている。目当てのゾーンをめざす人の流れを尻目に、カールは迷うことなくGBNエントリーゾーンを訪れると、受付アテンダントに声をかけようとして、ふと、歩み来る人影に視線を向けた。
「来ねえのかと思ったし」
「ようやくさつき完成したところなんだ」
カールは、デイスカウント・バイのレジ袋から愛機を取り出し、掲げ見せた。
「MGポリポッドボール」
ティムも、ガンブラ専用特注アタッシュケースから愛機を取り出し掲げる。
「MGジム・タービュレンスだ」

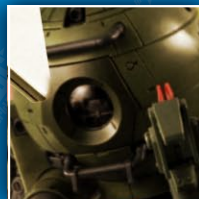
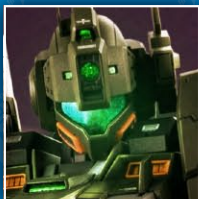


ジム(ティム・パレット)

ボール(アズマ・カール・トンプソン)

「悪いボール、地上戦までもつれ込んでいれば、その脚の本領発揮させてやれたのにさ！」
そう言うジムの口調は一切悪びれてない。そして、返すボールの口調も、なにやら雪辱を晴らしたにしては歯切れが悪かった。
「つていうか……なんかおかしー」
「最初からおかしかったじゃん、あいつ」
「じゃなくて奴の、ガンブラのこと」
「？」とジムは、撃破した琉依のガンブラに目を凝らした。爆発を逃れ、ただ屍となって漂っている、以前やられた時とは別のガンダム——ガンダム？
「ホントだ、なんか……へんだ」
「カスタマイズのせいかもしれないけど、素体の組み方そのものが、僕の頭の中にあるトリセツの、どれにも当てはまらない……」

それどころか、パーツの合わせは隙間が空くほどズレているし、モールドも思い切り雑。
ボールがハツとなった。
「……これ……戦動機士『ガンブーラ』!?」



▶ジム・ドミナスで参加したGBNであっさり敗北して以降、大学進学を諦めるほどにガンブラ制作にハマっている。親が決めた許嫁はいるものの、彼女が欲しいお年頃。

▶エア・ガンブラ選手権を制したことで知られる、妄想力に優れた模型職人。ボールを用いてリアルガンブラ制作をスタートさせた。8人家族で、カール以外は女性ばかり。

そうか脚だ!
蟹みたいな多脚があれば、ボールを安定した状態で重力下運用できる





REAR

ジム・ターヴェレンス

★父が大事に所有していた「ジム・ドミナンス」をベースに、厳しい「1000本ガンブラ」トレーニングを経て完成させたモデル。カラーリングはミリタリー色が強いものに変更された。名付け親はジムの許嫁。

FRONT



機体紹介
1



フェイク・ガンダム

★琉依XIII醒が運用していた機体で、「フェイクス」社が流通させているフェイクなガンブラ「ガンブーラ」の1機。トリコロールカラーを見る限りガンダムのようなが、細部をよく見るとディテールに違和感がある。



機体紹介
3

★蟹にヒントを得てビルドされた多脚型ボール。4本の脚パーツを追加したことで、OG空間のみならず、地上でも運用できる全環境適応タイプへと変貌した。中でも砲撃支援などで性能を発揮する。



ポリポッドボール



機体紹介
2

「ガンブーラ?」
「ガンブーラ」とは、海外にある裏ブーラモデル企業「フェイクス」がモノホンと偽って流通に乗せられていると噂されるフェイク・ガンブラだ。
「ネットで聞いたことある……GBNにまで入り込んできたのだから!」
「い、否! 断じて否!」
それまで沈黙していた琉依XIII醒が、信じられないと割り込んできた。
「この超凡たるガンブーラは、維新されし秩序の頂点に君臨する資格を授かりし者だけに与えられる、絶対支配のアイコン!」
「……………」
「だって我がボチった『選ばれたあなただけへのおすすめ』メールにちゃんと『絶対本物、あなたが満足、ニセモノちがう』って書いてあったもん!」
「やっぱガンブーラじゃん!」
ツッコむジムの一方で、
「つてことは……ひよっとして……」
ボールがなやら悪い顔で思いつく。
「このネタをGBNにバラすってその裏ガンブーラ会社を強請つたら、でかい金になるかも!」
彼の瞳に\$マークが浮かんだ。
持ちかけられたジムが、おもちゃを手に入れたように表情をワクワクさせる。
「金はともかくおもしろそうじゃね! すぐにログアウトして!」
「無理だ!」
新たな声が聞こえた。
発したのは、ガンブーラだった。
「お前たちはこのGBNから、二度とログアウト出来ない!」
晒然のジム、ボール、そして琉依に、ガンブーラは重く告げる。
要約すればこうだ、全世界にあまたあるフェイク・ガンブーラ会社に金型を納める一大闇金型マフィアが、ガンブーラたちにツールを仕込み、世をフェイク・ガンブーラで溢れさせようと目論む自分たちの陰謀がGBNからリアル世界に洩れる危険がある場合、

洩らそうとする者をハッキングによってログアウト出来なくしてしまうらしい。
「そこまで告げた次の瞬間、証拠を隠滅するかのごとく、そして、それらが真実であることを証明するかのごとく、ガンブーラが琉依を乗せたまま自爆した。」
理解するまでの沈黙。
「ちよっ……待てよ、闇金型マフィアの陰謀なんかはどろでもいとして、もしこのままログアウト出来なかったら……リアルで彼女作ること出来ねえじゃん! 今までフィアンセがいたせいで、彼女作れなかったんだぜ!」
「そんなのいるんだ……」
「お、親が勝手に!」
「それより僕の方だよ! せっかくなエア・ガンブーラ大会の賞金でゲットした『ブチル』のチケット、無駄になっちゃうよ!」
「んだよおまえ、アイドルオタかよ!」
その時だった、天より降り注ぐまばゆい輝きがジムとボールを包み込んだ。
おもわず息を呑んだ二人に、その声はもたらされた。
「このGBNのどこかに存在すると言われるレジェンド・ガンブーラに勝利し、そのガンブーラが装着している黄金のポリキャップ(ゴールデン・ポリキャップ)を手に入れなさい!」
「ゴールデン……ポリキャップ?」
ジムとボールが顔を見合わせる。
「そうすれば、現実世界に戻ることが出来るとか出来ないとか……そんな言い伝えがあるとかないとか……」
その声が消えるとともに、二人を包んでいた輝きが消失した。
「僕たち……いま……夢、見てた?」
「……夢だろつと、言い伝えだろつと、都市伝説だろつと、なんだつていい!」
ジムとボールは決意に硬い拳をぎった。
「なんとしてでもオレたちは、このGBNからログアウトしないと!」
こうして今、ゴールデン・ポリキャップを手に入れるべく、ジムとボールのレジェンド・ガンブーラを探し冒険の旅が幕をあげた。



次回、いよいよ本章スタート!
ジムとボールの、
黄金探しの旅が始まる!!
(のポリキャップ)

乱気流?
大荒れ? 動乱?
よくそんな愛称思いついたね

